

境には自然そのものが含まれることは勿論であるが、尙ほ人間が變化せしめた環境をも、その中に含めしめる。次に、地理學の重要な概念の「地域」をとりあげ、「地域の特殊性」を重要視し、現在のそれを思考し、更に過去に迄それを展開し、歴史的過去の地表の多様性を反省する事によつて過去の環境を再現し、それを歴史の一文書たらしめ、地理學を歴史研究に役立たしめやうと意圖するのである。

次に本書の目次を掲げて紹介の責を了り度い。

- 一、歴史の文書としての地理
- 二、地理的位置
- 三、氣候と歴史
- 四、交通路
- 五、町
- 六、境界帶と境界線
- 七、産物と經濟
- 八、文明の黎明
- 九、歐羅巴と支那
- 文獻

南洋日本町の研究

岩生成 一著

著者岩生氏はこと難かし氣な史論を立てることが嫌ひらしい。それよりも孜々として史料を蒐め、その上に地道な建築をしてゆ

く肌 of 學者のやうだ。從來僅にケエル・ベリ氏その他の斷片的な作品しか持たなかつた南洋日本町の研究が、このやうな確實な學者の手に取りあげられたことは何よりもうつつけだつたと言へる。まして近世日本の海外交通史に關しては岩生氏が第一線に立つエキスパートであることは今更紹介するまでもない。

この書は著者が嘗て臺北帝大文政學部史學科研究年報に連載された舊稿を補訂して南亞細亞文化研究所から公刊されたもの、題名の示す通り近世初頭の南洋各地に作られた日本町に就いての考證である。章を交趾、東埔塞、暹羅、呂宋に分つてそれらと同様な體例の下にその發生、位置、規模、戶數、行政機構とその主眼人物並に在留日本人の軍事、經濟、宗教等各方面に亘る活動を叙べ、結論として日本町の名稱、特質、要因等が論述せられてある。本書の價値については何を措いてもまづその貴重な資料の豊かさを擧げねばなるまい。南洋日本町といふやうな好題目が未だ纏つた作品として現はれなかつたのは、海外に存する資料の蒐集が困難だつたことも慥かにその重要な一因だつたといへる。著者の始と貪婪だとも思へるこれら資料に對する嗜欲がこの困難を見事に突破させたことは、この書に引用された文獻の蒐集範圍が、本邦は勿論、ハーグ國立文書館の植民地文書をはじめ西歐、南洋の各地にまで及んで、多數の稀觀書や未刊の文書を網羅してゐるのでもわかる。この書のどの一節の註記を開いて見ても、讀者はきつと古めかしい羊皮紙の臭ひに噓せかへることだらう。

著者の平明な筆は淡々としてこれらの資料を載せ、その物語

(朝永)

るがまゝに運んでゆくが、控える日なとも思はれるほどに慎重な論證のうちに幾多の新しい解明が輝かしく窺される。東埔塞に於る日本町をビニヤール、ブノンベンに考定された如きはその著しい一例であらう。だがそのやうなものは大なり小なりこの書の到るところに見出される。本書の刊行によつて我が國民による南洋發展史の研究は貴重な礎石の一つを置き得たといつてよい。

併しそれにしても著者が主題の範圍を嚴密に日本町そのものに限る、その背景たるべき各般の事情に對して故ら筆を控えて居られるやうに思はれるのは物足りない感じもする。殊に當時日本人の關係した諸事件に就いての證明が省かれてゐるのは、卒讀するもの、理解を困難にはしまい。同様に著者は先人の業績に對してもなるべくそれらと記述の重複する愚を避けやうと努めて居られるかに見える。併し、例へば東恩納氏によるアヌティヤ發掘の成果の如き、メナム川から引いた舟堀に面してかなり大きな日本人館の規模が明かにされたかと記憶するが、そのやうなものが資料として正しい批判の下に用ひられてあつたとしたら、讀者は寧ろ本書から一層の便益を受け得たに違ひない。といへこれは専ら「研究の前進」を意圖して居られる著者に對しては見當違ひの妄語であるかも知れぬ。

圖版はいづれも珍重すべきものだが、研究年報に掲げられたもの、うち數葉が省かれてゐるのは何故であらうか。殊に一六四四年のブノンベン前面の戰鬪圖を割愛したのは、それが考證の直接の資料でもあり、他に見得ないものであるだけに惜しまれる。

終に人名、件名の外、船名索引を附したのは親切であるが、地名に就ては今少し鄭寧であるのが望ましい。

時局の展開と共に日本人の海外發展が云爲され、南洋がいたく我が國民の注意を惹きつゝある時、本書のやうな着實な研究が公にされたことは何よりも悦ばしい。著者はこの書の上梓を前にして三度南洋に旅し、最近更に豊かな收穫を得て歸朝されたと聞く切にその健筆を祈るものは敢て評者のみではあるまい。

なほ本書を刊行された南亞細亞文化研究所は目下各方面の資料を蒐集しつゝ、多數の學徒を動員して南方文化の研究を進めると共に逐次貴重な勞作を續刊されるといふ。併せて今後の活動を期待する次第である。(本文三七頁、圖版十八葉、東京地人書館發賣、定價四圓)(室賀)

H. G. Creel, *Studies in Early Chinese*

Culture, First Series, London, 1938.

上代支那文化の研究

日・G・クリール

先年「*Birth of China*」の一書を世に送つた著者にとつて此の書は支那滞在より歸國後の第二の發表である。Andersonsにより開始された支那新石器時代研究の分野に、我々は今一人の年輪まだ三十代の著者の登場を迎へることになつた。本書に見られる新しき資料の驅使と才氣ある理論の構成とは、著者の若さと共に我々に極めてアトラクティブなものを感じしめる。次に本書の内容を簡単に述べて見やう。